



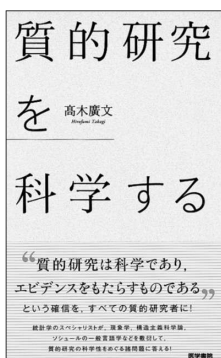
赤ちゃんの死へのまなざし

両親の体験談から学ぶ周産期のグリーフケア

編著：竹内正人，著：井上文字／井上修一／長谷川充子

発行：中央法規，TEL：03-3379-3861，定価：2100 円(本体 2000 円＋税 5%)

本書は、第一子を出産予定日直前に亡くした夫婦が、そのときの経過や思いを振り返りながら、父として、母として、それぞれの心情を綴った文章と、そこに関わった医師とナースの文章、そして 4 人が一堂に会しての座談会で構成されている。周産期のグリーフケアで一番大切なことは、人と人とのふれあい、心と心を通わせたケアであり、どんなにマニュアルどおりのケアを行っても、そこに心が伴わなければ、患者・家族の心には響かない。この指摘は、周産期の枠を超えて、人のありようや生き方にも踏み込んで、広く社会へ向けての提言となっている。



質的研究を科学する

著：高木廣文，発行：医学書院，TEL：03-3817-5657

定価：2100 円(本体 2000 円＋税 5%)

著者は、「研究方法は量的研究と質的研究に分けられるが、量的研究は客観的で再現可能で、科学的証拠の水準が高いと考えられるのに対し、質的研究は科学性や一般化可能性があると断言できる根拠はどこにあるか」という疑問から本書を著したという。量的研究を専門とする立場から、質的研究とは何か、科学とは何か、質的研究の主観的記述には客観性が必要か、質的研究の結果は一見当たり前に見えるのはなぜか、科学研究がもつ普遍化、一般化の問題、飛躍したアイデアをなぜ思いつくのか、など興味深い問題を次々と、わかりやすく取り上げている。



こんな罪深い私に、二度と明日なんて来なくていい

著：伊東零，発行：幻冬舎ルネッサンス，TEL：03-5411-6710

定価：1260 円(本体 1200 円＋税 5%)

25 歳で自ら命を絶った娘(著者)の遺志を継いで、その母が、娘が残した日記と詩をまとめるとともに、その胸の内を赤裸々に綴っている。娘は 20 歳で初めて本気で恋をして妊娠、しかし相手の男性に捨てられ、父親の説得でやむなく中絶、その後心臓の病を患ったのだ。わが子を自殺で失った悲しみと、娘の気持ちに気づいてやれなかった悔悟の真情を吐露しつつ、こんなつらい思いをもうこれ以上、誰にも味わってほしくないという遺族の切実な願いが込められた本書は、またしても年間の自殺者が 3 万人を越えている現在、多くの人々に読んでいただきたい。



本は、これから

編：池澤夏樹，発行：岩波書店(岩波新書：新赤版 1280)

TEL：03-5210-4111(販売部)，定価：861 円(本体 820 円＋税 5%)

タイトルの「本は、これから」をテーマに、本に関わる仕事をしている 37 人によるエッセイ集である。作家や学者、書店員など執筆陣は多士済々で、思わずニヤけてしまうほどだ。大雑把に「本」といっても、通底しているのはやはり「紙の本はどうなるのだろうか」ということ。2010 年は「電子書籍元年」という言説が飛び交ったが、そのなかで本を取り巻く人々の思いはどのようなものだったのかを読み取ることができるだろう。全体をとおして紙の本への愛着が滲み出ているように感じられるが、1 つのテーマでこれほどまでに多様な語りが表れてくるのが非常に面白い。